



る。手術は両目各1回で計2度受けている。一度は失敗したらしく、右目は左よりも見えにくい。したがって普段は左目だけで見ている。右目も生きてはいるが「スベアとしてはある」程度である。両目で見ることはなく、左目も、コンタクトをしていても近くのもの見えにくいという状態だ。妹がひとりいるが、妹に視力障害はない。両親からの遺伝は優性遺伝で確率は50%である。Aさんの言葉によれば「妹は化け物です。普通〔の視力〕。わたしらからすれば宇宙人です」ということになる。それくらい視力障害を特別なものとみなさない環境にあった。その環境では弱視にせよ「見える」彼女は暗眼者であった。親の介助を受けることなどない、むしろ彼女が親の介助者であったのだ。子どもの頃買ってくれたおもちゃも数字を覚えさせるためだったと彼女はにらんでいる。

〔親を〕手引きする。〔親をバス停に〕連れていって、バスの番号覚えてたんで、数字を覚えたいとか。2、3歳のときに数字を。マグネットで電子レンジにひつつくようなん、おもちゃみたいのん買ってくれたんですよ。で、なにをさせるんかなと思うたら、これ数字覚えさせるんですよ。はい番号いうてみ、言うてね、あれ何番?とか。うまいこと利用されるんですよ。賢かったな、親は(笑)。買い物するとき値段見たり、バスの行き先の料金みたり、仕事ですからね。わからなかったら窓口に言って聞いて来いと。〔障害者〕手帳渡されて、どこどこまでの料金聞いて来いって先に走らされるんですよ。自分もイラチやから。んでね、どこどこまでふたりとか〔駅員に言う〕。それ仕事でしたからね。学校からのお便り読んだりとか、字い早よう覚えた方やと思います。〔〕内は筆者加筆、以下同様。

親の介助をうけて育たなかったということも、彼女が自身の障害に気づく時期を遅らせたのではないだろうか。

彼女の話からは、両親が彼女の誕生をどう思っていたのか、推測できない。優性遺伝であることは知っていたのだから、彼女が視覚障害になることもまた予測できたであろう。障害をもたない人や、親族に障害者がいない場合、「普通」、子どもの誕生に際して親になる人は五体満足を望むものであろう。子どもが障害をもって生まれた場合の親の葛藤の激しさは、要田の研究〔要田、1999〕に詳しいところである。既存の社会「常識」が親自身に与えている障害者への差別観、親族からの容赦の無い否定的な言葉や所作、地域の人びとの目線、その目線を意識して動きがとれなくなる苦痛、そのような時期を経て障害のある子どもを障害もろとも引き受けていくまでの過程は、その時間の長短に限らず、激しい葛藤があることがうかがわれる。既存の社会「常識」からすれば、「普通」そのようなものであろうとわたし達は想像する。しかし、Aさんの親にそのような葛藤は、すくなくとも彼女の話からは見出せない。これは、彼女の両親に直接聞きたいところであるし、安易な判断はできないのだが、何世代にもわたって視覚障害者を

産んできた彼女の生育家族にとって、視覚障害が特別なものではないという認識があったのではないだろうかという推測が成り立つ。その認識のうちには、視覚障害があっても社会生活を営めるという自信があったのではないかと想像するのである。障害がスティグマ<sup>(4)</sup>であることは経験上も充分知っていながら、なおそれを跳ね返すだけの強靱なものがあったのではないだろうか。

彼女は親から介助を受けなかった。逆に親を介助していたのだが、彼女にストレス<sup>(5)</sup>はなかったようである。子どもの頃の記憶をたどっても、そういう話ではできなかった。「由緒正しき盲人一家」と自身を紹介するほどに、障害のある人たちに囲まれて育ったことが影響しているのだろう。親の介助を「仕事」と受け止め、そこに特別な価値観を持ち込んでいない。見えないことの不自由さ、不便さは認知できていたけれど、それが社会的にどのような意味をもつのかまではまだ理解できていない。生育家族のなかでは、健常者として「おまえは普通だから」と言われ、またそのことに疑問をもたず、ストレスも感じないでいられたようである。彼女は「障害」にネガティブな印象をもっていない。障害は本人が自覚してネガティブにうけとめ、障害者になるのではなく、社会がネガティブなものであるとして「障害者」と名指すのである。

(筆者) よそのお母さんではできるけど、うちのお母さんではできないっていう、そういうことは？

(Aさん) まあ、あんまりないですけど。〔学校の〕そういう行事のときとかはあったかな。それより面倒くさいっていうのが一番。自分でやれよって。仕事が増えるっていうしんどさ。

(筆者) 親の介助をしなくちゃいけないっていう。

(Aさん) 介助をしなくちゃ。読み書きですね。

(筆者) 読み書き？ 役所？ 自分でやれよ？

(Aさん) 〔親に対して、自分でやれよと〕言ったことある。

(筆者) なんておっしゃった？

(Aさん) なんて言うたかな？ 忘れた。でけへんのじゃ言うたかもわからんし。そんなに問題になるようなことはなかったです。

(筆者) 残ってない？

(Aさん) 残ってないです。面倒くさいとかいうのはけっこうありましたから。

そうはいつでも本音は辛かったのではなどという解釈は深読みであり、障害者家族は辛いものだという、他者のステレオタイプな思い込みである。Aさんの家族にとって障害は当たり前にあるものであり、特別なものではなかった。家族内では淡々と受けとめられていたのだ。

それにしても、「障害」は彼女自身にとって遠い言葉であった。「障害者いうのんは、親のことやと思ってました」というとおり、自身に結びつかない言葉であ

った。

## 2-2 反主流

現在彼女はコンタクトレンズを使用しているが、小学生の頃はメガネを使用していた。「牛乳瓶の底みたいなレンズのメガネ」だったという。「気がついたときには」(本人談)メガネをかけていたと言うのだから、もの心ついたときにはすでにそのメガネは手離せない状態であったのだろう。

彼女が小学校にあがる年、一家は引越しをし、彼女は新しい土地の公立小学校、普通校に通うことになる。慣れない土地で見知らぬ人びとと最初の集団生活が始まったのである。好奇心にあふれた児童に「牛乳瓶の底みたいなレンズのメガネ」が目にとまらないはずはない。画一化され、同化を要求する集団生活において、突出した差異はすでに好奇心の対象ではなくなり、ストレートに排除に向かう。定石どおりと言うべきか、彼女はイジメにあうことになる。

ひとりやったんですよ。知った子がいない。[わたしのことを]見慣れていないから、だからよけいね、イジメがあるでしょ。気持ち悪いとか。担任〔の先生〕がイジメる方の肩もつんですよ。給食のときに、[同級生が]「お前来るな、気持ち悪い」とか言うんですよ。で、言うたんですよ、担任に。そしたら担任がその子つかまえて「あんた、そんなこと言った？」と聞くんですよ。そなん[相手の子は]「言わへん」言うでしょ、もちろん。そしたら、[担任の先生が]「そら、言うてないで。あんたのヒガミや」言う。あ、そうかこっちの言うことは聞かんのやって。いつもその調子やった。

〔イジメの原因は〕見た目が気持ち悪いっていう、それだと思いますけどね。プールはいるなとかね。そういうことがあって、もめたりしました。

「気持ち悪い」、「きしょい」という言葉が投げつけられたと言う。ここで彼女が認識しているのは障害(見えにくいこと)による排除ではない。スティグマになっているのは牛乳瓶の底みたいなレンズのメガネであり、容姿による排除であったということである。ここでも障害は彼女の認識の表面にでてきていない。

小学生であり、周りにまだ友達もいない彼女にとって、不正を正してくれと訴えられるのは担任の教師だけであっただろう。公正を期していたその相手に「ヒガミ」としかとらえられなかったのである。心のなかで園がみして地団太を踏み子どもが想像できる。初めてあじわった疎外感であっただろう。

小学校低学年のときのこの体験は、後々まで彼女の心に深い傷となって残っていったようである。排除の不当性は公正な評価を得ぬまま正されなかった。子どもにだけでなく、オトナに信用されなかったことが大きな傷となった。「こっちは聞いてくれへん」「軽くみられとる」、自己は逸脱した存在である、逸

脱者であることを内面化する契機になっている。

人間不信かな。それがやっぱり大きいんかな。人がバカにしてる、周りが。そんな気がするんですよね。だからなに、こっちの言うことは聞いてくれへんという。うーん、なんか溶け込めへんいうか、わざとこう反主流派に。足をひっぱるとかね、そういうふうになるんです。おもしろくないんですよね。

おもしろくない、のは当然である。足場をおいているはずの集団は自身を排除しようとしているのである。なにか得体の知れないものが背後から忍び寄って貶めるのである。わけがわからなくとも敵は敵である。闘うしかないと、子ども心にもそう結論する。

逸脱の原因は容姿の問題、メガネであった。そのメガネは小学校5年のときにははずして、それ以後コンタクトレンズに変えている。容姿の問題は解消されている。しかし、プサイク（本人談）だという印象は周囲に残ったし、自分もそう見られている感じは残った。「人間不信」は後々まで彼女のなかに残り、行動を縛った。「社会集団は、これを犯せば逸脱となるような規則をもうけ、それを特定の人びとに適用し、彼らにアウトサイダーのレッテルを貼ることによって、逸脱を生み出すのである」[ベッカー、1963=1978：訳書17]。「きしょい」というレッテルを貼られたことによって、彼女は逸脱者となった。そして、オトナにも理解されないことによって人間不信に陥る。自分は理解されない、逸脱していると感じる。このように彼女は逸脱を内面化していくのだが、それが「障害」に起因するものだとは考えていない。彼女の場合、盲学校入学前後まで自らの「障害」を認識することはなかった。

[イジめられていてもそれは障害が原因だとは思わず]容姿の問題とか。メガネの問題とか。障害というのはもっとたいそうなイメージがあるんですよ。白杖つくとかね、それこそ、そう。介助せなあかんものというかね。普通に動けてふつうに見える人が障害とは思いません。代筆とかするひとが障害とは思いません。うちのなかで一番見える人[なのだから]。

しかし、彼女の認識がどうであれ、見えにくいという事実は生活に支障をきたしていく。学校の宿題などが間に合わなくなっていくのである。

(筆者) 見えないから、できないとは思ってなかったの？

(Aさん) 思ってなかったです。作業が遅いっていうのはようわかってっただんですけど。よう怒られとったです。いかに能率よくやるか、とことん考えた。[手を] 抜けるとこは抜かな思うでしょ。今度は必

要のないことさえへんねん。

(筆者) 効率的に。

(Aさん) そう効率的に。落としていくしかないんですよ、時間がないから。

(筆者) 遅いといわれていたの？

(Aさん) 遅い。それとミスが多い。

(筆者) それは見えないからでしょ？

(Aさん) そうなんかなあ。今考えたらそうかなあとと思いますけど。たしかにおっちょこちょいというもあるから。写しの違いとか、そういう類のミス。いま思い出すと、なんですよ。あ、そう〔見えにくいのが原因〕かっていう。そのころは必死でしょ。毎日なんとかのりきらなあかんっていう、宿題なりなんなり。生活の知恵。

(筆者) それはずっとやっぱしそうだった？

(Aさん) うん、ずーっとそう。

いま思うと視力障害のせいで遅かったのかもしれないと思う。しかし、その時点では自身を暗眼者・健常者であると見なしている。

見えにくい、宿題がたまるという状況でも、成績はまあまあだった。「〔学習内容なんて、〕一回やり方を覚えたら、何度も同じことをなぞらなくてもわかる。あんな、事務処理みたいなこと。同じことをさせるから、退屈で」(本人談)、要領もよければ、理解も早かったようである。事務処理みたいな勉強はやられていないと思った。

中学を卒業したとき、普通高校へ進学する気はなかった。事務処理を続けるよりは、「宿題のないところに行こうと思いました。〔仕事を終えて〕帰ったらおしまい、っていうような」(本人談)、そういう仕事をしようと就職を考えたが、たまたま母親が見つけてくれた専修学校がおもしろそうだったのでそこに進学した。大学受験の資格はとれるが、学歴上高卒にはならないという専修校だった。当時としては珍しく週休2日で、自由な校風が気に入った。変わった子ばかりきていて、楽しかった。いまでもそのときの友達とは仲がいいという。この時期について、彼女は障害に関連することを話題にしていない。授業は英語でうけていたというから、それなりに彼女のいう事務处理的な学習はあったと想像されるのだが、楽しかった印象が強い。教科も少なかったというから、タイトな授業ではなかったのだろう。自由な校風、変わった子ばかりの環境は、彼女の反主流とよく合っていた。

### 2-3 気づき

そして、大学に進学するのだが、それでもまだ彼女は障害を意識していない。彼女が進学したのは、外国語大学であった。専攻は英語である。大学に進学するときは、まさかまた事務処理が待っているとは思わなかった。ところが、

学校も外大やから小さい字読まなあかんでしょ。作業量がこんなにあってそれやってきなさい。事務処理みたいな勉強。ひたすら辞書調べて書いて。しんどかったですよ、正直。

〔大学でも〕宿題ありました。ひたすら訳しなさいでしょ、予習が。あてられて、読まされる、退屈しました。一時休学。やめよっていつとき思って。半年休学。1年いったって、〔お金が〕もったいない。大学ってものすごい作業量、それもいままで勝ち上がってきた人達だから早いですよ。こなすのが。それが終わっても宿題がでるんよ。これはどうしてもついていけんなど。ほんまにそのとき、初めてかな、そう思ったのは。ひょっとしたら、だから〔見えにくいから〕遅いんかなと思いだした。字がだんだん小さくなってくるし、拡大コピーしだしたのもそのときから。

拡大コピーは、大学が提供したのではなく、彼女が自分でやっていた。視力が下がったのではなく、専門書を扱うため、文字が小さくなったのである。大学の授業についていこうと努力したのであるが、「ひょっとしたら、だから〔見えにくいから〕遅いんかなと思いだし」て、彼女はやっと別の道を探すことを考えはじめる。自身は晴眼者であるというアイデンティティに揺らぎが生じた。そして、就職を考えたとき彼女は盲学校に入学する道を選ぶ。

現在、文部科学省は障害児に対し原則分離の考え方をとり、事実上障害者を養護学校においやっている。それに対して教育の欠格事項をなくすべく障害当事者、その保護者などから反対の声が高い。教育の段階から障害者を社会から分離していくあり方は、結果的に健常者／障害者という分断をうみ、障害者を差別的に扱う土壌となる。共に学ぶという視点からも見直されなければならないのではないだろうか。

名著『ハマータウンの野郎ども』には、イギリスの都市下層労働者階級出身の若者が、社会化の過程で自身労働者階級を選択していき、自身の位置を獲得していくさまが克明に描かれている〔ウィリス、1977=1985〕。労働者階級の若者が反学校文化を踏襲していくことで階級を選択していき、結果下層階級を再生産していくのである。そこでは教師は無策である。日本においても、教師が在日韓国朝鮮人、被差別部落といった被差別マイノリティへの不平等を再生産していく過程を描いた研究もある〔西田、1996：237-258〕。教育の問題は、都市下層、被差別マイノリティのみの問題ではないだろう。分離教育が結果的に障害者という社会的に不利な場所へと子どもを送り出していくことにはならないだろうか。

身体障害が重篤でない障害者は普通校へ進学する。受け入れているから免罪できるというものではないだろう。普通校へ通う障害者の実態は調査もされていない状況である。Aさんのケースにみるように、個々人に必要なニーズは検討されていないままである。

## 2-4 どっちつかず

自分は晴眼者だと思っていたから、盲学校なんて行ける人違う、はいれるわけがないと思ってました。そこまで重症違うやろと。周りもそう思ったし、親も普通に暮らせるやろという。〔大学同期の〕皆さん就職とかする。なにしようかな。漠然とですけど、OLとか事務職はシンドイなあ。好きでもないし。手に職つけようかな。手作業でもいいから、できることならええんちゃうかってね。料理だったらできるんちゃうかとか、そんな話をしつつ、母親の実の母親〔視覚障害者で按摩師〕のところに旅行がてら行って、「仕事がないんや、どないしようかな」という話をした。したら、「盲学校行って資格とりんか」言われて。「資格は邪魔にならんけに、持ってたらええんじゃ」とか言うんですよ。

親からも盲学校行ったらって。うちの親からそんなこと聞くとは思わなかった。どっちかっていうとあんたは普通だからと言ってきてたから。そんなこと言うんや。じゃ、いっぺん聞いてみよと思って、それから。

盲学校は学齢期の子どもが通う幼稚部から高等部普通科までであるが、そのうえに鍼灸マッサージ師を養成する専攻科がある。専攻科は就学する年齢も幅があり、概して少人数制である。彼女が就学したのは、24歳のときであった。

ところで、彼女は入学前に障害者手帳を取得している。手帳の有無は入学の条件に入っていない。格別手帳を取る必要はなかった。しかし、彼女は手帳を取った。手帳の取得が入学条件ではないことは知っていたが、「障害者として便利かな、〔視覚障害のある家族は〕みんな持っているし、という軽いノリ」で取ったという。障害者に移行するなら、持っておこうくらいのノリである。ここには「障害を受容する」といった気負いはない。「由緒正しい盲人一家」という障害者家族の一員であったことも、晴眼者から障害者への移行を助けたのかもしれない。

盲学校は楽しかったと彼女は振り返る。のちに結婚することになる男性と知り合ったのも盲学校だった。「少人数だし、田舎の学校みたいにみんな仲がよくて、部活もあったし、文化祭やったこととか、楽しかった」と言う。事務処理みたいな学業を離れ、見えにくいという現実を障害として受けとめ、将来の仕事にもメドがたって、盲学校は順風のスタートを切ったようだった。

しかし、ここで障害の重度／軽度問題に突き当たることになる。

たとえば、わたしは介助慣れしてるから、なんかあったら〔友達にも〕読み上げたり、連れていったりする方でしょ。あんた見えるからええなあとかね。見たもの口にだして言うでしょ。そんなに見えるのとか言われるとドキッとしますね。これは言うど…〔問題があるのかもしれないのだがという躊躇があった〕。現実、基準に該当しない人がいるんですよ。入学基準よりも〔視力の〕いい人が。入ってくるんですよ、授業料タダだから。普通の学校へいったら授業料ごっつうかかるからそこへ入



ってくるという人も何人かおるわけですよ。そういう人へのやっかみみたいなものあるでしょ。そんなん聞いておって、ひょっとしたら、わたしもそう思われてるのんちゃうとか。そういう人がおるからあかんのやとか、そういう人攻撃するのけっこう厳しいです。え、わたしのことちゃうとかかと思って。そういうのがあって、あんたそんなに見えるの？とか。やばいなあ。たしかに彼らにしたら、ものすごく〔目が〕いい人なんですよ、わたしは。読み書きして手引きしてくれる人って暗眼者なんですよ、わたしらのくくりとして。介助するほうだから。

そしたらどうもこっちを見る目が違うんちゃうか、いうのが気になりだして。

あれっ、ここは安心しとったらあかんねんなあって。なんか怪しまれているんか、疑われているとか気になりだしてね。できるからいいねえっていう。ああ、できることにしとかなあかんねんなあ、っていう。今度はそれに縛られて。

「どっちつかず」という言葉を彼女は使った。健常者社会にあっては、反主流として矜持をたもっていた彼女だが、むしろ盲界での方が気遣いを強いられることになった。

そして、彼女は障害者手帳を返上することになる。

(Aさん) 盲学校にはいるときにね、一回〔障害者手帳を〕とった。でも、「ええー、あんたがぁ～〔その等級なのか？〕とかいろいろいわれるのがイヤになって。区役所の窓口に行って、要りません、返しますわ、言うて返上してん。

(筆者) 受け取ってくれたの？

(Aさん) 不自由しませんからいいですわ言うて、返した。ほな、受け取ってくれました。

(筆者) へえ、珍しいケースですね。返上したっていう。

(Aさん) そのときは、等級、大目にでとったんですよ。それもあって、やあやあ言われるから。

(筆者) 大目って、そのときは何級？

(Aさん) 4級。〔症状の悪さが〕ですぎた。〔診察のとき〕適当に言うったらそうなってしまった。別に4級だったらどうや〔＝有利になるから〕ということではなかった。

視覚障害の場合、4級以上が重度障害である。経てきた経験や他者との比較から「そうなってしまった」と彼女は言うのだが、手帳取得の診察の際に多少のずれがでてくることは珍しいことではない。彼女の場合もそうであるが、障害は常に固定しているわけではない。症状の固定を「障害」と名づけるのであるが、そ

れはいわばこれ以上の治癒はない状態とみるべきであって、「固定」といっても日によって、あるいは季節によって症状に開きがでてくることは視覚障害に限らず多いのである。症状が重くでてしまったことに「後ろめたさを感じさせられた記憶」が蘇ったのだろう、インタビューの際に「そうなってしまった」というやや自責を含んだ発言になっているのだが、彼女が故意に症状を重く申告したわけではなく、その日の状態で「適当に言うとしたら」そうなってしまっただけである。しかし、そのことが思わぬ波紋を生じさせた。前述したように、彼女は盲学校では晴眼者である。

わたしより重度の人が5級とか6級だと〔あなたのように軽い症状の人が重度の手帳をもっているのかと〕いわれますねん。それ、つらい。ルーペ使ったりとか家ではしていましたけど。〔大学まで〕学校にはもっていても使わなかった。学校の黒板とか見んでも言うたことメモしたらノートはできるわけです。いけてましたからね。〔使う〕必要がなかったです。そのころは全然そういう意識がなかったから。盲学校いってからのほうが逆に気いつかうようになったけど。そういう、そんなやつとしたら〔ルーペを使うと〕重度そうに見えるから。そんな程度で使うな、とか言われるから。

結果、彼女は手帳を返上する。返上にいたるまでの抑圧感は、相当に重かっただろうと想像される。

障害のためにそのままでは就職がないかもしれないという理由で、盲学校に入りなおしたのである。健常者から障害者へと所属を変更したのである。拡大コピーもルーペも堂々と使える環境になったはずであった。ところが、今度は逆に障害の「軽さ」を理由にルーペの使用にも気を遣わざるを得ない状態に陥る。障害者になったつもりが、健常者（晴眼者）だと名指される。そして、障害者としてのアイデンティティの象徴である障害者手帳を手離すにまで至った。健常者（晴眼者）でもなく障害者（盲人）でもないという奇妙な立場にたつことになったのである。皮肉である。

障害者には階層制（ヒエラルキー）があって、より重度の障害者、つまりは健常者の身体からより離れている障害者ほど他の者より嫌がられるということがあると指摘したのはマーフィーである〔マーフィー、1987=1997〕。このヒエラルキーは障害の重篤さは生きづらさと比例するかのような認識・世間智とも呼応している。障害のヒエラルキーは、脈々として歴史的に構築されてきたものではなかったのだろうか。近代化にともない、身体は労働力として計測され標準化された。そして標準化された身体だけを受け入れるとしてきたわたし達の社会が、なんの疑問もさしはさまずに当然のごとく受け入れてきたものである。標準から離れば離れるほど、排除に向かうとされる。ほんとうにそうだろうか。近代産業化の初期ならばそうであったかもしれない。しかし、わたし達が暮らす社会はそう単

純ではない。この社会は障害者を排除の位置に置かない、あるいは置きつつそれをあからさまにしない分別をわきまえている。排除しつつ、懐柔するのである。

障害のヒエラルキーは健常者がマジョリティである社会では、より重度の障害者に不利に働くはずである。だが、Aさんのケースではまったく逆の作用をしている。一般に流布しているのは、障害のヒエラルキーにしたがって、より重度の方から排除は直線的に進むという言説であろう。しかし、常にそうとは限らない。誰がマジョリティであり誰がマイノリティであるかによって、シーソーは沈む場所を変える。障害のヒエラルキーは、ここでは逆の作用を示した。そして逆に作用しても、それがうむ抑圧の効果は同じである。Aさんはこうして一度手帳を手離した。

大学、盲学校在籍当時、彼女も他の学生同様アルバイトを経験している。そこでの経験について彼女は、

(Aさん) 健常者社会で仕事をするとき、「できますか？」って言われたら、「はい」って言うてしまうんですよ。悲しい。仕事があると思うと。だいじょうぶです〔とってしまふ〕。…〔けれども〕ちょっとしたことでも気いつけなあかん。バイトのとき休み時間でもせっせと働くんですよ。点数稼いでおかんと、なんかあったときに、真面目でええ子やと売っとかんとあかん。ちょっと見逃したりとかあるでしょ。だからええイメージをつくっとかなとかね。健常者のとこにおいてシンドイ。いつも短刀持って切腹せなっていう緊張感。いったんなんかあったら、小指どうぞっていう、そういう感じですよ。ヘルペス、でるんですよ。そういうの、あんまり続くと。居酒屋のホールのバイトをしだしたときにでましたわ、見事に。それで辞めましたわ、〔ヘルペスのせいで〕もう立ってられへんから。

(筆者) それはなにがストレスだったの？

(Aさん) 注文とるのにみんな手えあげるんです。わたしはみつけれへんでしょ。みんなそれを見てさーっと行くのに、ずっと立ったまんまなんですよ。仕事とられへんのですよ。あかんわ。呼んどののに気いつかへん。「空いたお皿をどンドン下げてください」って言われて、空いていると思ったらまだ入るとるんや。「お前目が悪いかい」〔とお客さんが〕言うてね、「そうです」言うて、笑っているけど…。厨房で焼き物やらされるんです。生焼けを何回か出したんです。これは問題になるかもわからん、2週間で辞めたんです。最短ですわ。

一見ただけでは障害者に見えない彼女は、とくに印象操作をしようと努めな

くとも、健常者で通る。黙っていればわからない。アルバイトも健常者と同じように選べる。しかし、一般雇用でも障害に対する配慮はまだ充分ではないが、アルバイトであればなおのこと障害への配慮はない。というか、配慮が必要な人をアルバイトには雇わない。仕事を得ることはできるのだが、バレたらクビになる怖さがある。だから、気づかれぬように細心の注意を払わなくてはならない。「健常者のとこにおいてシンドイ。いつも短刀持って切腹せなっていう緊張感。いったんなんかあったら、小指どうぞっていうそういう感じですよ」という言葉はその感覚をよく表している。

手帳の返上やアルバイトの経験などを経て、盲学校の2年生になった頃から、彼女は自分の微妙な位置を考え始めるようになった。そして障害者関係の情報を調べ、軽度障害ネットワーク<sup>(6)</sup>というインターネットによるセルフヘルプグループに出会う。健常者でもない、障害者でもない自身の位置と重なり合い、彼女はここを居場所と感じた。

## 2-5 晴眼者でもなく盲人でもなく

それから数年の後、29歳のときに同じ盲学校の同期生であったやはり弱視の男性と結婚する。彼の視覚障害は1種2級である。結婚前、彼の母親から子どもは産まないだろうと言われて彼女は「凹んだ（本人談）」。子どもができたら当然産むものと考えていたからである。現在は、

〔子どもが視覚障害をもって生まれてきても〕それでいいやないかと。ふたりで〔話し合っている〕。確率は2分の1。彼の場合は風疹ですわ。だからそっちは関係ない。たまたま同じ白内障になってますけど。

いつのことかわからんですけど〔ずいぶん前に〕、ダンナ、おかん〔＝ダンナの母親〕のことがイヤになったことがあって。「あのころ〔＝彼を妊娠した当時〕病院の先生がちゃんと検査しておったら、こんな障害のある子、産まへんのに」みたいなことを〔ダンナの母親が〕うちのダンナに言うたらしいですわ。「ほな、俺おれへんねんで」「いや、1年したらもう一回産んだらええねん」〔とお母さんが言った〕。「それは僕やないやろ」と。そういうことを言い合いましたことが何回もあって。そのときからかな、うちのダンナもそういうこと考えるようになって。優生思想とか勉強してますけどね、たまに。自分がおらへんでどうということやろと、考えるようになった。だからふたり〔Aさんとダンナ〕のあいだでは、別に検査しようなんてそんなことはないです。だから、お母さんがいろいろ言うてきても、もう〔迷わない〕。

現在はもう迷わないと彼女は言った。

「淘汰」されるべき「悪質」な遺伝形質と「保存」されるべき「優良」

な遺伝形質という分割は当然のことながら、そのどちらかを有するかによる人間の分割（つまりは差別）を生み出してきたし、さらには特定の民族や人種を「淘汰」されるべき「劣等」なものとして位置づける発想と結びつくことさえあった。まず私たちが確認しなければならないのは、優生学の根底にあり、これを突き動かしてきた、ある明確な価値判断である。（市野川、1999：128）

周囲の理解や自身の考え方によっても違ってくるのだろうが、先天性の障害者の多くは、結婚や出産に際してこの問題に突き当たるのではないだろうか。自らを淘汰されるべき人間であると迫るかのような、この価値判断は残酷である。しかもこの価値判断はさほど深く斟酌されないまま、なんとなく、当然のように社会に受け入れられている。自覚的でなければ、障害当事者でさえその陥穽に落ちそうな危険をはらんでいる。誰か個人の考え方の是非を問うのではなく、障害者を見るまなごしに、この思想が深く根を下ろしていることにわたし達は注意を払わなければならない。

現在彼女はマッサージ師としてK市内で働いている。自立生活をする肢体不自由な重度障害者のところにも仕事に行く。その人達と仕事以外でも交流がある。

自立生活をする〔肢体不自由な〕重度の障害者は、盲界とはあんまり付き合いがないんですよ、おんなじ障害者でも。だから、その人らにあんたはいいねとか言われるのは逆じゃないんです。彼らと接していて、〔障害が〕軽度〔であること〕のつらさを感じたことはない。イヤなことを言われたことがない。話がしやすい。ちょっと間がある。〔お互いに〕あまり身近でなかったから、かな。ある意味そっちでもそんなやねっていう、そういう話ができるんですよ。たとえば、学校のときにつらかったという話、仕事の話、遠慮するという話とかね。こっちは聞けるし、むこうもああそっちもそうなんやと聞いてくれる。別にうらやましいとか、あんた歩けるからいいねとか言わないですね。彼らは。逆に盲界にいるとね、あんたはええねとかそういう話になる。

自立生活する〔肢体不自由な〕重度障害者に違和感とかもつことはないですね。そういう生き方もありかとか。楽になれた。あれだけ割り切れたらいいなあとか憧れるわ。カッコええなあと思った。違和感はないですよ。それがでけへんのがまた軽度っていう。そういうのもありかっていう、知ったっていうのも嬉しかった。無理して働かなくてもええか、わたしらそのまま生きていてもいいやないか。開き直り、カッコええなあ思う。

障害種別が違っていると理解ができにくいのではと考えられるのだが、ここに

みるケースではかえって理解しあえるようだ。種別が違うことがクッションとなって、適度な距離が保たれている。学校のときにつらかったという話、仕事の話、遠慮をしてしまう話などは、種別を超えて共感しあえる。彼女もその住人である盲界ではかえって理解されなかったが、自立生活をする障害者とは気楽に付き合える。

いまは楽しい、とAさんは言う。一度返上した障害者手帳は就職のときに取り直した。今度の手帳は2種6級である。もう手帳の級数にうしろめたさを感じることはない。現在の職場も健常者と一緒であるから「いつも短刀持って切腹せなっていく緊張感」が消えたわけではないが、仕事も充実しているようである。趣味もふえた。「太鼓たたくのも楽しいし、〔自転車〕外にでるのも楽しい」と最後に笑顔で話してくれた。

### 3 おわりに

わたし達の社会は基準となる身体を要請し、基準外の身体を異物として取り除いていこうとする。その結果、障害は逸脱とされる。逸脱だとされる障害に貼り付けたスティグマの影響力は根深い。そして、この社会は排除の順番にしたがって障害のヒエラルキーをもっている。障害者は序列化されており、障害が重篤なほど排除にむかうとされる。その序列は健常者のみならず、障害者も内面化している。そこから障害の重篤さは生きづらさと比例するという言説がうまれてくる。だが、はたしてそうだろうか。

重度障害者とそれより軽い疾患に見える障害者を区別して問題にする必要があるのかという批判がある。また、軽度障害者は重度を差別するという見解もあれば、軽度問題は重度問題が解決されたときには必然的に解決されるという見解も見受けられる。しかし、ことはそう単純ではない。これらの見解は障害の重さは障害を負う個人の生活の困難さ・その生きづらさと比例するという直線的な見解のうえにたった、いわば素朴な見解と言わざるを得ない。しかも、他者の生きづらさを計量するかのような不遜な態度に気づいてもいない。そのような素朴な見解が、軽度障害当事者の葛藤を封じ込め、閉塞感に追いやっていく。Aさんが手帳を手離したように。

私たちの社会が重度障害者へ向けるまなごしは、いまだに排除しようとし、差別するまなごしであろう。しかし、逆にその贖罪として優しく、同情的であり、庇護の対象とみなす側面もあわせもっている。庇護の対象となることが当事者にとっていかに迷惑であり屈辱的であったとしても。しかし、社会的な役割を果たすことは期待されていない。社会的な役割を果たすことを期待されていないことがまた、当事者にとって屈辱であったとしても。よくも悪くもそこへのサンクションはない。

一方、社会は一見、軽度障害者を受け入れているようにみえる。しかし、まだマシであると位置づけて省みない。結果、軽度障害者は健常者でもなく障害者と

もいえない「どっちつかず」な場所に追いやられているのが現状である。

軽度障害者は重度障害者とは別様の生きづらさをかかえているのである。

本稿では生きづらさと名づけた。障害が重度ではないけれど、いやむしろ重度ではないからこそ感じざるを得ない生きづらさを、ひとりの女性の物語から考察した。これまであまり考察のなかった軽度障害者、そのような障害者の存在への気づきに、本稿が一助となれば幸いである。

#### 【注】

- (1) びっこをひくこと。
- (2) 生活史は筆者が彼女にインタビューをし、それをもとに構成し、彼女の許可をえて掲載している。
- (3) 水晶体が白くにごる病気である。
- (4) ギリシャ語で、奴隷や犯罪者の身体に刻印された徴（しるし）の意。個人に非常な名誉や屈辱を引き起こすもの。
- (5) 障害者家族内のストレスについては80年代以降論議をよんでいる。介助を担うのは主に女性であり、そのジェンダー偏向も論議的となっている。
- (6) 軽度障害ネットワークについては田垣（2000）

#### 【参考文献】

- Barns, Colin Mercer, Geoffrey & Shakespeare, Thomas, 1999, EXPLORING DISABILITY: A Sociological Introduction (=2004杉野昭博・松波めぐみ・山下幸子訳『ディスアビリティ・スタディーズ—イギリス障害学概論』明石書店)
- Becker, Howard, S., 1963, Outsiders Free P, US (=1978村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社)
- Goffman, Erving, 1963, STIGMA: Note on the Management of Spoiled Identity, Prentic-Hall, inc. (=2001, 石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房)
- 市野川容孝, 1999, 「優生思想の系譜」石川准・長瀬修編『障害学への招待—社会、文化、ディスアビリティ』明石書店127-157
- 石川准, 2004, 「見えないものと見えるもの」, 医学書院
- 軽度障害ネットワーク  
<http://www3.kcn.ne.jp/~ottotto/md/index.html> 2005.11.29
- Murphy, Robert F. 1987, The Body Silent, Henry Holt and Company, Inc. (=1997辻信一『ボディ・サイレント』, 新宿書房)
- 西田芳正, 1996, 「不平等の再生産と教師—教師文化における差別性をめぐって」八木正編『被差別世界と社会学』明石書店237-258
- 田垣正晋, 2002, 「軽度」障害者という「どっちつかず」のつらさ『部落解放』501, 解放出版社, 100-103
- Willis, Paul E., 1977, LEANING TO LABOUR: How working class kids get working class jobs Ashgate Publishig Limited (=1985, 山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房)
- 横塚晃一, 1975, 『母よ！殺すな』, すずさわ書店
- 要田洋江, 1999, 『障害者差別の社会学』, 岩波書店

(あきかぜ ちえ：大阪市立大学大学院)